

Vistas

KOBE COLLEGE
NEWSLETTER

24

2013・November

●Published by KOBE COLLEGE

神戸女学院大学



“Beauty Becomes a College”

神戸女学院岡田山キャンパス移転80周年記念シンポジウム
「ヴォーリス建築の魅力とメッセージ」

〈対談〉優れた建築空間により養われる人格
今竹 翠（株式会社今竹代表取締役社長）× 飯 謙（神戸女学院大学学長）
〈記念シンポジウム〉ヴォーリス建築の魅力とメッセージ
隈研吾（建築家・東京大学教授）／山形 政昭（大阪芸術大学教授）／江戸 雪（歌人）

神戸女学院岡田山キャンパス移転80周年

マルクスに学び、現代社会を解いていく——7

社会の中での役割を考えながら
文学部 総合文化学科 石川 康宏 教授

自然言語の根幹にある規則性を探る——11

言語学者 由本 陽子 さん

●2014年4月からの新プログラム
＜リベラルアーツ&サイエンスプログラム＞

主体的に学び、共感性の高い人格を養う——13

神戸女学院大学 飯 謙 学長

●ロックフォード大学との交換留学制度
国際社会での活躍を目指して——15

文学部英文学科4年生 田中 さん
ロックフォード大学交換留学生 IVY さん

●メアリー・アンド・グレイス・ストウ学生寮

消防訓練 ～卒業生による講演会～

訓練の重要性を学ぶ——17

●企業研究ワークショップ

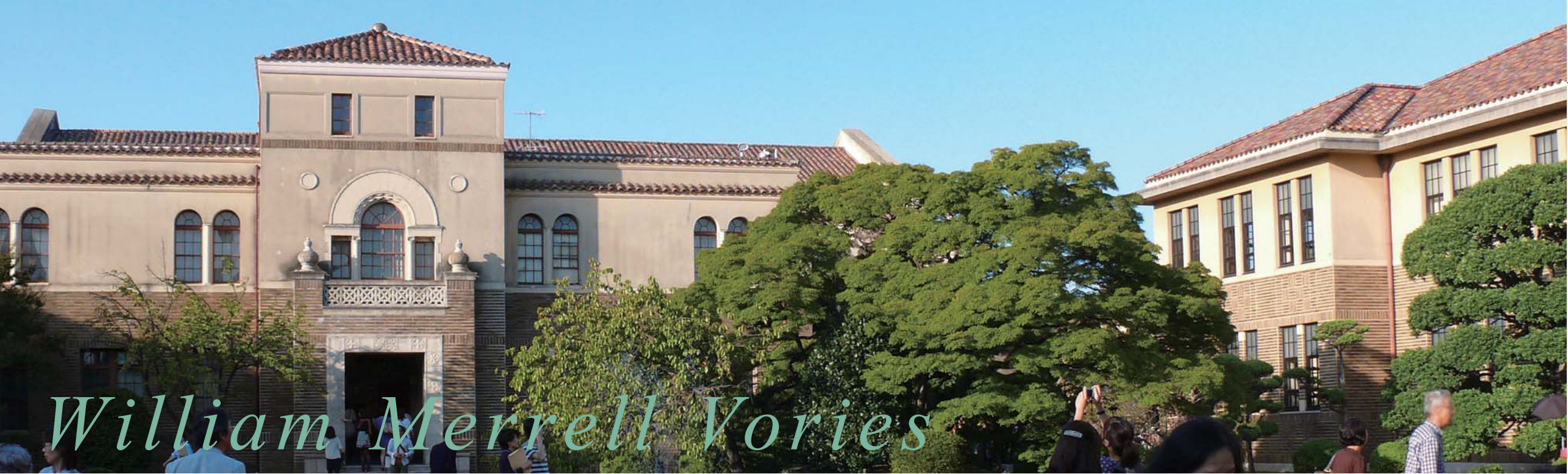
就活のノウハウを学び、企業を肌で感じる

●受賞者紹介

記念賞を受賞して——18

KCインフォメーション——19

【神戸女学院岡田山キャンパス移転80周年とヴォーリス建築】 優れた建築空間により 養われる人格



●株式会社今竹 代表取締役社長

今竹 翠——IMATAKE Midori

●神戸女学院大学 学長

飯 謙——II Ken

神戸女学院は、1933年に神戸市山本通から西宮市岡田山へとキャンパスを移し、今年で移転80周年を迎えた。岡田山キャンパスを建築設計したのは、アメリカに生まれ、日本で数多くの西洋建築を手掛けた建築家であり実業家でもあるウィリアム・メレル・ヴォーリス。デザイナー・建築家、そして本学院の建築コンサルタントでもある卒業生の今竹翠氏をゲストに迎え、飯学長と、岡田山キャンパスにおけるヴォーリス建築とその影響について語り合う。



建築の特徴はどう見られますか？

今竹 多くの機能をかたちに消化しています。私が過ごした中学部・高等学部は、非常によく考えて造られていて、一つの建物の中に中等教育に必要な機能が全て含まれていました。例えば裁縫等の畳の部屋、階段教室、図書室、料理と理科の実習室や標本室、他を邪魔しない場所に音楽室、アメリカ人の英語教員のための控え室、さらには生徒個人用ロッカーや体育館までが無理なく美しく集約されていました。そのおかげで、当時は珍しかった生徒が教室を移動するプラトーン方式が可能だったのです。

飯 今の大学のメイン4棟と音楽館も、同じように全ての要素がコンパクトにまとめられています。音楽館は大きな音を出してもうるさくないような谷間に造る等、配置にも配慮がなされていますね。

今竹 全ての校舎共通のディテールのきめ細かさも特徴的です。廊下、教室など、建物内の床と壁を直角でなく、鍋底のように小さいラウンドコーナーにして埃が溜まりにくくしてある。壁と天井の間に、廻り縁という細い棒状の見切り材を廻しているのも美しいですね。

部材にもこだわっていて、ドアの取っ手等の細かな建築金物は、恐らく日本に同じ物はありません。ランプ等の古く珍しい物もあり、これらはヴォーリス氏自身が輸入

したのだと思います。また、階段や踊り場の「テラゾー」。これはコンクリートと色石を混ぜて大理石のように見せるのですが、本当の大理石を使うよりも強い。左官コテの後に砥石やサンドペーパーで磨く、とき出しや、水磨きという技法で仕上げている、大変な手間がかけられています。

今竹 私が中学に入学したのが1949年。当時の校舎はまだ築16年ですね。新築同様です。終戦直後でしたから、西洋建築の校

●周辺環境を配慮した移転計画

飯 神戸女学院は今年で移転80周年を迎えました。私が着任した移転50周年の際にはキャンパスの引越に参加したOGの方もまだ大勢いらつしやり、一つ時代の川を超えたという感じがします。今竹さんは80周年と聞いていかがですか？

今竹 私が中学に入学したのが1949年。当時の校舎はまだ築16年ですね。新築同様です。終戦直後でしたから、西洋建築の校

舎は別世界のものという感じがし、一般家庭には無かったスチームヒーティングのカーンカーンと響く音は今でも印象に残っています。それが80周年！よく手入れされているのが、外からでも解ります。

飯 大切に使っているということもありますが、今も新しさが感じられる不思議な建物です。キャンパスの移転は第3代校長院長エミリー・ブラウンの頃から検討されており、1886年の「神戸又新日報」には、周辺の環境が悪くなったため移転を考えて



は明治末期から終戦までの約40年間に1500を超える建築物に關与しています。単純計算では1カ月5件ほど同時進行していたことになり、神戸女学院建築の時期には梨花女子大学や近江兄弟社学園の校舎等も手掛けています。ヴォーリス氏の集中力は大変なものです。

今竹 本当に、世界に誇れるキャンパスです。調べてみると、ヴォーリス建築事務所は明治末期から終戦までの約40年間に1500を超える建築物に關与しています。単純計算では1カ月5件ほど同時進行していたことになり、神戸女学院建築の時期には梨花女子大学や近江兄弟社学園の校舎等も手掛けています。ヴォーリス氏の集中力は大変なものです。

●建築空間が 人格形成に影響を与える

飯 ヴォーリス氏は1933年の同窓会誌「めぐみ」に「建物自身が学生に積極的な影響を及ぼす。新校舎は、学生が、他者に仕える」という美の観念を啓発する場所であるべきだ」という内容を明快に記述しています。先程の、教室を明るくし過ぎない建築も、学びに適した環境を意識しており、廊下を出ると突然明るくなるのは、苦勞して勉強をした後に到達する喜びを表しているようです。

●校舎に対するヴォーリスの心遣い

飯 岡田山キャンパスにおけるヴォーリス



■今竹 翠(いまたけ・みどり)
神戸女学院中学部・高等学部卒業。アメリカ・ブラットインスティテュート卒業。B.Ind.Des.。オリエンタルホテルのホテルアイデンティティデザイン導入でデビュー。デザイン分析を基盤に、食器、ユニフォーム、ランドスケープに至る大小各分野のデザインに従事。西宮芸術文化協会副代表、DAS理事。元大阪府立産業デザイン研究センター所長、元大手前大学教授。神戸女学院建築コンサルタント。大阪府顧問。西宮市民文化賞受賞。『エレメントオブデザイン』などの著書も。父親はメンソレータムの商標やオーパントのデザインを手掛けたグラフィックデザインの先駆者・今竹七郎氏。

建築物も優れていますが、そのような歴史、先輩達、自然を含めての環境を十分に楽しみ、遊び、勉強して卒業し、これからの日本に対応できる人間になって欲しいです。

今竹 暗いところへぱつと光が入ってくる——明暗のつり合いは空間分析の造形の基本なのです。私がアメリカ留学で学んだデザインとは空間の分析であり、その観点からヴォーリス氏の「好ましい空間が人格形成に好影響を与える」という考えがよく解り、共感できます。

中学部・高等学部の図書室は中開きのドアを開けると目の前に大きな部屋が広がり、階段教室は背後から光が差し込むため、段上に先生の姿が明るく浮かび上がりました。そこに座っているだけで小学校とは異なる学びの空間を感じたものです。——もつとも、イタズラもしましたが……。

飯 ヨーロッパの音楽大学に留学した卒業生は、初めてその大学を訪れた際、他の留学生が西洋建築の建物や雰囲気驚き、委縮するなか、少しも物怖じせずに入行して行けたそうです。建物から威嚇ではなく、人に奉仕し助けようとする美しさを感じた。その方も岡田山キャンパスからヴォーリスの心遣い等、多くのことを学んでいたからでしょう。今竹さんもヴォーリス建築の中で過ごされて、美の観念を啓発されたと感じますか？

今竹 私は毎朝の礼拝の行き帰りに講堂の

壁面のテクスチャーを触り、眺めながら歩いているうちに「質感」が体に入ったように思います。あの質感や空間が建築への興味を湧かせ、今の仕事に就かせたのかもしれない。神戸女学院でこれらのものに触れ合えたのは大変有難いことです。

先日、講堂の塗り直しに立ち会ったのですが、その塗装屋さんは親御さんの代から神戸女学院の塗装に関わっていて、「自分は五才ころから親について来て、岡田山の林の中で遊んでいた。だからこの壁をよく

卒業後に比較の対象を得ることで、本学の環境が最高だったと再発見し、他者に配慮して生きることが人生の礎としてどれほど大切なものであるかに気付くのです。



■飯 謙(いひ・けん)
神戸女学院大学学長。同志社大学神学部、同大学院、スミス・パーゼル大学神学部学ぶ。専攻は旧約聖書学。博士(神学)。83年に神戸女学院大学助手となり、講師、助教授を経て95年文学部教授、2009年から学長。また、96年から神戸女学院チャプレンを務める。『聖書学の方法と諸問題』『旧約詩篇の文献学的研究』『旧約聖書と様式史』『ヨブ記』などの著書がある。

知っている」とのことでした。当時は胡粉を膠で溶いたものや、真鍮と赤銅の粉を混ぜた塗料も壁面に使っていたそう、日本人形の顔に施す材料を建築にも使っていたと知って感動しました。壁に触れなくなったのも道理です。その方も真に美しい透明で深みのある塗装について、岡田山で啓発されたと言えそうですね。

飯 そのような愛情の籠もった仕事が行われていたとは存じませんでした。移転50周年記念礼拝で伺ったのですが、藤棚の下に敷かれている煉瓦も、岸和田の煉瓦屋さんが一枚一枚十字架のマークを入れ、神戸女学院生のために祈りを込めて焼いて下さったのだそうです。本学はそういった他者の配慮や祈りの籠もった場であることを、語り伝えていかなくてはなりません。

最後に、本学で学ぶ学生に何かメッセージをお願いします。

今竹 1871年、欧米視察の岩倉具視ら

【神戸女学院岡田山キャンパス移転80周年記念シンポジウム】 ヴォーリス建築の魅力とメッセージ

10月12日、神戸女学院は岡田山キャンパス移転80周年の記念行事を開催した。当日は、記念礼拝に続いてシンポジウム、見学会および茶話会が行われ、設計者ウィリアム・メレル・ヴォーリスが手掛けた講堂をメイン会場に、およそ1000人の学校関係者と一般来場者が参加。記念礼拝とシンポジウムの様子はメアリー・アンナ・ホルブルック記念館と文学部1号館の会場にも同時配信された。シンポジウムでは、建築家の隈氏、ヴォーリス建築研究家の山形氏、本学卒業生であり歌人の江戸氏がそれぞれの立場からヴォーリス建築や岡田山キャンパスについて語った。その後、飯学長を交えてキャンパス設計におけるヴォーリスの心遣い等について語り合い、来場者からの質疑応答も行われた。



1／当時の建築委員長ハロルド・ウォレス・ハケット氏の次男ロジャー・フレミング・ハケット氏からお祝いのビデオレターが届き、その上映も行われた。
2／図書館本館ではヴォーリス建築事務所作品集等を展示公開。3／礼拝ではヴォーリスが作詞作曲した献堂讃美歌「Dedication Hymn」も歌われた。4／講堂の乳白色のステンドグラス

デフォレスト先生 召天40周年に寄せて

今年は神戸女学院の第5代院長C.B.デフォレスト先生の召天40周年にあたる。学院では、岡田山へのキャンパス移転という大事業の舵取りを担った先生のこと、今はご両親と共に



仙台の地に眠っておられることなどを次世代に語り継ぐことを考え、記念行事を守ることと決定した。森孝一院長以下学院の一行は、3名の学生たちと共に6月29・30日に仙台を訪問し、仙台在住の卒業生やゆかりの人々と墓前礼拝を守った。また2日目には先生の墓地の管理を委託している日本基督教団仙台北教会の主日礼拝に出席した。7月5日には、学院においてデフォレスト先生召天40周年記念礼拝を守り、仙台北教会の小西望牧師より、「太白山と太平洋」と題して、日本とアメリカで、神を愛し人を愛する生涯を全うされた先生の事績が語られた。

C.B.デフォレスト先生について

デフォレスト先生は、1874(明治7)年、後に同志社を設立する新島襄と共にコロラド号に乗船して来日し、日本のキリスト教会に大きな足跡を残したアメリカン・ボードの宣教師J.H.デフォレスト博士の次女として1879(明治12)年、大阪に生まれ、新島より幼児洗礼を授けられた。仙台で育ち、高校、大学をアメリカで終え、宣教師として来日。1905(明治38)年より神戸女学院で英語・英文典・音楽・聖書などを担当した。1915(大正4)年に第5代院長に就任し、1933(昭和8)年、教育の充実と発展を見越して神戸の山本通りから岡田山へのキャンパス移転を実現した。25年間院長職を務めた後に名誉院長となり、その生涯を神戸女学院のために捧げて、1973(昭和48)年に召天した。仙台市青葉区北山の輪王寺境内のデフォレスト家の墓石は、一方は仙台の人々が愛する太白山を、一方は故国アメリカにつながる太平洋を望むように建てられている。それはあたかも一家が、遣わされてきた故国と、遣わされた日本、2つの国を覚えながらその生を全うしたことを象徴しているかのようである。

◀仙台北教会の会員のみなさまのご奉仕により美しく整えられたデフォレスト先生の墓前



デフォレスト先生がお手製の洋服を着せて大切にしていた人形(めぐみ会所蔵)▶

パネリスト(抄録)



●大阪芸術大学教授
山形政昭——YAMAGATA Masaaki

建築により表現された リベラルアーツの理念

岡田山キャンパスは、中庭を中心に構成されています。そこにはキリスト教主義に相応しいシンボリックで理想的な空間が置かれ、講堂脇の通路からもその様を望むことができます。ヴォーリスは見せたい部分を様々なアングルから特別なシーンとして展開されるようキャンパス全体を設計したのです。

また、豊かな緑の中には、元所有者の尼崎藩主の別邸に由来するという樹木や庭石が見られます。建物に和を加味した環境を

融合させたデザインにヴォーリスの特色が感じられます。ケンウッド館のベランダを見ると、柱上には木材の桁が乗り、春日灯籠風の照明灯具には西洋のレリーフが施され、ここでも地中海様式だけでなく日本と西洋の楽しい融合が見られます。

さらに、図書館本館の外壁下部にはスクラッチタイルが市松模様張られ、その目の太さまでをも配慮した細やかな仕事が見られます。そうした工事の念念さについて、施工者である竹中工務店の竹中藤右衛門氏は「美しい大仕事」と語っていました。

このように、ヴォーリスは建物に個性を持たせながらキャンパス中心としての中庭にまとめあげることで、建築によりリベラルアーツカレッジの理念を表現しました。それこそがキャンパス設計の目標であり理想だったのではないのでしょうか。

■山形政昭(やまがた・まさあき)
1949年大阪生まれ。京都工芸繊維大学大学院建築学専攻修士課程修了。工学博士。大阪芸術大学建築学科教授。専門は建築歴史、建築計画、なかでもウィリアム・メレル・ヴォーリスの建築と、関西の建築家、近代建築。『ヴォーリスの建築』(創元社)、『ヴォーリスの西洋館』(淡文社)等、著書多数。

岡田山キャンパスで育まれた 感性と強い精神

私は中学部入学から大学卒業までの10年間、毎日、岡田山の坂を一步一步登って学校に通いました。今思えば、どれだけ気持ちの落ち着くことだったでしょう。岡田山の風景はもちろん、今この講堂に立った時の足の感じ、匂い、声の反響：このような環境全てが原風景として私の中に残っています。

キャンパス内で特に好きだったのはソールチャペルです。蝋燭を模ったステンドグ



●歌人
江戸雪——EDO Yuki

ラスや窓のアーチ、讃美歌の響き、緊張感のある冷たい空気：中学部、高等学部、大学へ進むにつれ、それらをとても美しく感じるようになりました。また、講堂横の仄暗い渡り廊下から中庭へ出た時の明るさ。あのクラツとするような一瞬は忘れられない感覚であり、後ろに「影」のあるこのちよつとした空間は、私に大きな影響を与えました。

私の短歌には神戸女学院の坂や中庭、廊下、精神がよく出てきます。例えば、精神。「つめたさのひそかに育つ月をみて女といえど泣くことのあり」——女は泣きますか? (笑) 女だけの空間にいると強くなるのは、影を知ったからではないでしょうか。暗さを知る者は明るさを知り、明るさを知る者は強い。岡田山キャンパスで育った人にはそういう強い精神が宿っていると思うのです。

■江戸雪(えど・ゆき)
高槻市出身。中学部から神戸女学院に学び、1989年文学部総合文化学科卒業。結婚後に短歌を始め、4冊の歌集、1冊の入門書を刊行、咲くやこの花賞文芸部門受賞。そのほか、ながらみ現代短歌賞等を受賞。『塔』短歌会に所属し、歌人として様々な活動をしている。近畿大学工学部非常勤講師。

メインスピーカー(抄録)

様式建築と近代建築の融合

神戸女学院が移転した1933年は、建築史上、移り変わりの時期です。19世紀までの装飾的な様式建築と20世紀のシンプルで近代建築。光の陰影や装飾物の質感、ヒューマンなスケール感覚等、双方の時代のよいところを取ることで出来た最後の時期とも言え、この面白い時期に岡田山キャンパスが建てられたのは、奇跡の滑り込みだと思えます。

ヴォーリス建築の特徴として、豪華さを慎重に避けたことが挙げられます。この講堂も、内壁はベージュ色の石のように見えますがそうではなく、微妙な模様付けをし、特別な塗料で質感を出しています。ヴォーリスは、大理石を使わなくても左官の技でこれだけのことができるという証明をしたのです。そのほか、珍しい乳白色のステンドグラスや床の船舶用タイル等、彼の材料の使い方は特別です。ここには心地よく、品のあるものが集められており、豪華さは神戸女学院の精神にそぐわないのではないかとメッセージのようにも思えます。

日本の左官技術を活かす

ヴォーリスの建築物には随所に日本的な



要素が見られます。日本は左官仕事に優れており、壁等にギザギザやザラザラといった質感を付ける職人技は世界一と言っているほどです。神戸女学院の瓦屋根は、様々な色を混ぜて深みが出され、全てのタイルに刻みを入れることで陰影を作り全体のバランスが取られています。これは大変手間のかかる作業であり、世界でも珍しい技法です。ヴォーリスやそのライバルとされるフランク・ロイド・ライトも日米双方の建築を研究しています。私も、栃木県の馬頭町広重美術館に地元の八溝杉や烏山和紙等を用

いたり、中国に竹の家—グレートバンブーウォールを建てたりと、日米のよいところを建築物に反映させており、彼らの研究は大変参考になります。

これからの建築の手掛りとして

20世紀の工業社会時代は終わつつあります。今、本当に人間が必要としているのは大量生産できる工業ではなく人間の原理です。もう一度建築について考え直す必要があり、80年前のヴォーリス建築—周囲の環境との関係やディテール等、たくさん

の宝がある神戸女学院の建物は、その手掛かりになります。ヨーロッパやアメリカではキャンパスが教育の一番大切な手段と考えられています。ヴォーリスが地形に惚れ込み、それを活かそうと試行錯誤したのである神戸女学院のキャンパスは、貴重な例でもあるのです。



<来場者インタビュー>

- 65回高等女学部卒業生
「ヴォーリス建築のことは卒業後に知ったのですが、図書館本館のモザイクや壁等、当時の面影がそのまま残っていてとても懐かしいです」
- 一般来場者
「建築に興味があるので、親娘で来ました。本当に綺麗な建築ですね。今日はヴォーリスの建築設計に対する思いが聞けてよかったです」
- 卒業生とその友人
「5年ぶりに来ましたが、新しい校舎も景色に溶け込んでいて安心しました。私にとって、ここはいつでも戻ってこれる場所です」
「もともとヴォーリス建築が好きなのですが、今日は彼女の勧めで一緒に来ました。居心地がよくて惹きこまれます」

Interview

マルクスに学び、 現代社会を解いていく

● 社会の中での役割を考えながら

資本主義経済の急速な発展と同時に、労働者の苦難が噴出した19世紀。カール・マルクスが行った資本主義のしくみや社会の歴史に関する研究、政治・経済を改善する労働者運動への取り組みは、21世紀の今も尚、大きな意義と影響力を持っている。「はげしく学び、はげしく遊ぶ」をスローガンに、マルクスに学び、現代社会の諸問題を研究している石川康宏先生に話を伺った。

● 文学部 総合文化学科
石川 康宏 教授——ISHIKAWA Yasubiro

マルクスに学び、現代を読解する

——まず、石川先生とマルクスの出会いについてお聞かせください。

学問的な物心がついた瞬間に出会ったのがマルクスの社会理論でしたから、マルクスとは学生時代からの付き合いです。ぼくが立命館大学に入学した1975年には、大学生の間に政治や社会について語りあうのは当たり前、語れない者は恥ずかしいという空気がありました。マルクス派、ケインズ派、ウェーバー派……と歴史に名を残す偉大な人物の誰に重きをおくかといったことが日常的に論じられていたのです。学生たちは思い思いに自主的な勉強会を行なっていて、ぼくもそういう場で、初めてマルクスの『共産党宣言』を読みました。見事に何にも理解できませんでした(笑)。当時はまだ同級生の4人に1人しか大学に進学できなかった時代です。たまたま条件に恵まれたのだから、学んだ事を社会に還そうと、学びの意義についても大いに語り合いました。

——そのマルクスに関する著書を、近年になって出版された背景は？

2008年のリーマンショックをきっかけに「資本主義限界論」が欧米で話題になり、アメリカの政府高官からは「恐慌の話はマルクスに聞け」という言葉さえ発せられました。資本主義経済の根本問題は何かということが、あらためて話題になる中で、マルクス



について書かないかと誘われたわけです。まず『マルクス資本論—理論劇画』(2009)に協力し、つづいて、当時総合文化学科におられた内田樹先生(現名誉教授)と『若者よ、マルクスを読もう』(2010)を、さらに単独でも『マルクスのかじり方』(2011)を出しました。論じるにあたって心がけたのは、マルクスはなんでも正しいという「原理主義」にしないということです。21世紀の日本と世界を読み解くヒントをマルクスとの対話の中で探していくという読み方が大切だと思ったからです。

——本の反響はいかがでしたか？

『若マル』を出版した時に「初めてマルクスに触れました!」と、学者をふくむ若い世代から驚きや喜びのこもった声をたくさん聞きました。

昨年の後期には、大学の授業「知への好奇心」で、同じ総合文化学科の高橋先生(ブラトン)や大橋先生(スピノザ)、そして内田先生(レヴィナス)と一緒に、ぼくもマルクスを論じさせてもらいました。毎回100人もの学生が受講したのには驚かされました。

若い人の中には短い人生経験から「世の中いつもこんなんだ」と思っている人もいます。しかし少し視野を広げてみれば、人間社会は相当大きく変化しており、今後も大きく変わりうる。学生達はそのように変化する社会を丸ごとつかもうとするマルクスの大胆な精神に、ずいぶん驚いていたようです。

Karl Marx
カール・マルクス

古典家たちの思想・哲学に接することで、物事を根本から捉えることの面白さに気付いてもらえたら嬉しいですね。

経済政策の分析から女性学、ジェンダー、「慰安婦」問題へ

――神戸女学院へご就任以来、マルクスに限らず多岐にわたる研究をされていますが、その変遷を教えてください。

大学院では鉄鋼産業を題材に、日米大企業の間接関係を研究していましたが、総合文化学科への赴任を機に、資本主義経済の理論問題にテーマを大きく移しました。そして、これを深めるには日本経済や日米関係の具体的な内容にもっと通じる必要があると思い、次に日本の経済政策の分析に進みました。現代を探究する経済学（2004）がそのあたりの最初のまとめになっています。

他方で、学生には、市民的教養としての経済学を論じていましたが「女子学生の人生にうまく寄り添えているのか」という疑問をもつようになりました。経済学に男女の関係を組み込む必要を感じ、フェミニズムに詳しい同僚たちに声をかけて「神戸女学院大学ジェンダー研究会」を発足し、そのメンバーを中心に『はじめてのジェンダー・スタディーズ』（2003）を出しました。当時のゼミは経済と女性といったテーマでした。

――その後、ゼミのテーマは「慰安婦」問題に変わっていますね。

2004年の卒業旅行で韓国へ行き、自由時間に訪れた「日本軍「慰安婦」歴史館」で強い衝撃を受けました。この問題を自分ももっと深く学びたいし、教育者として広く学生に伝える必要もあると考え、ゼミのテーマをごろりと転換しました。毎年学生たちと韓国で「慰安婦」被害者の話を聞き、国内では「靖国神社・遊就館」、「女たちの戦争と平和資料館」等を訪れるようになりました。そして、『ハルモニからの宿題』（2005）から『ナヌムの家』にくらし、学んで』（2012年）まで5冊の本をゼミで出してきました。これもちかかりの反響があり、私にも学生にも、他大学や女性団体等からかなりの数の講演依頼がありました。

経済と政治 歴史問題を運動させる

――それらの取り組みは、経済学の研究にどのような影響を与えましたか？

「慰安婦」問題やより広く歴史認識の問題を扱ったことは、東アジア経済の今後を考えるひとつの重要な視点となりました。関連して憲法9条「改正」の影響を経済学者として論じたこともありました。それまでの専ら経済政策からのみ政治をとらえていた視野が、かなり広がったと思います。経済と政治、外交と歴史認識を結んで日本の資本主義をとらえるというチャンネルが出来ました。「覇権なき世界を求めて」アジア、憲法、「慰安婦」（2008）はそうした一冊です。

たと思います。

原発エネルギー問題に着手する

――今後の展望をお聞かせください。

2012年からゼミのテーマを、原発エネルギー問題に転換しました。かつて、「慰安婦」問題にくらりと転換して以来の大きなテーマの変更です。福島第一からは今も大量の放射性物質が出つづけています。全国に54基も原発のある状態で、はたして安心して暮らしていけるのか、現実性の高い代替案は何か。そんなことを学生たちと考えています。昨年今年と、3年ゼミで福島の原発を見に行き、原発反対運動を40年も続けている地元の方に

――それで著書の内容に政治に関する部分が増えていったのですね。

そうですね。2006年から兵庫県知事選挙に関わるようになり、地域経済の立て直しという極めてリアルな問題を考えずにおれない立場にもなりました。

また東日本大震災には大変なショックを受けると同時に、その後の政府の被災者支援やエネルギー問題での無策に憤りを感じ、「人間の復興か、資本の論理か 3・11後の日本」（2011）を書きました。人間の経済活動と自然との関係を考える上では、マルクスの視角もヒントになってくれました。

さらに「維新の会」の台頭には強い危機感を感じ、同じような意見をもった人たちからの要請もあって『橋下「維新の会」がやりたいこと』（2012）を出しました。そこでは「慰安婦」問題や歴史認識の問題、財政・経済政策、自治体論、基本的人権の問題、政治的民主主義など、それまで勉強してきたことをある種総動員することになりました。

知識人としての社会的役割を考えて

――石川先生のように執筆テーマの幅が広いスタイルは珍しいのでは？

多くの大学時代には社会の中の「知識人」という言葉が生きていました。ある分野の専門研究者として秀でいるだけでなく、いつも人の世のあり方を広く考え、まっとうな進路を開く努

も話を伺いました。この9月には3泊4日で福島に行きました。あの事故のために、福島だけで今も15万以上の人が避難生活を余儀なくされていますが、そのくらしの実情をよく知った上で問題を考えていきたいと思います。

現在3年、4年それぞれのゼミで関連する書籍を作っており、2014年の「3・11」までには、いずれも出版の予定でいます。

また、この7、8年ほど、マルクスと現代といったテーマでくくられる、ジェンダー論、人口論、資本主義発展論、未来社会論などの論文を書いてきましたから、それを一つの本にまとめたいとも思っています。



■石川康宏（いしかわ・やすひろ）

1957年、北海道生まれ。立命館大学2部経済学部、京都大学大学院経済学研究科修了。1995年に神戸女学院大学に赴任し、2004年より教授。最近の著書に『橋下「維新の会」がやりたいこと』、『ナヌムの家』にくらし、学んで』（共著）、『マルクスの思想を今に生かす』（共著）などがある。他に『人間の復興か、資本の論理か 3・11後の日本』『マルクスのかじり方』『覇権なき世界を求めて』『いまこそ、憲法どおりの日本をつくらう！』『現代を探究する経済学』、内田樹氏との共著『若者よマルクスを読もう』、ゼミ編著『女子大生と学ぼう「慰安婦」問題』『輝いてはたきたいアナタへ』、憲法県政の会編著『憲法どおりの兵庫をつくらう』等。総合社会福祉研究所理事、子どもと教科書全国ネット21代表委員、憲法が輝く兵庫県政をつくる会代表幹事、全国革新懇代表世話人。



◀ 石川教授の著作。取りあげたテーマはマルクスから経済、ジェンダー、「慰安婦」問題と多岐にわたる



石川ゼミでは2012年から「原発エネルギー問題」がゼミテーマ。写真は福島県でのゼミ研修の様子





身近に感じる疑問から始めて
それを説明できる規則を
見つけることを積み重ねていけば
自分で新たな発見をすることが
できるかもしれません。

自然言語の根幹にある規則性を探る

——生成文法を中心とする理論言語学——

●言語学者

由本 陽子 さん——YUMOTO Yoko

普段、私達は何気なく言語を話しているが、その言語を成り立たせている「単語」や「文法」にはどのような規則性があるのだろうか？
生成文法理論には“自然言語(人間の言語)の様々なパターンの根幹には全ての言語を作り出すシステムがあり、そのパラメータのスイッチの＋、－の違いによって個々の文法が出来ている”という仮説がある。
大阪大学で英語の教鞭を執るとともに理論言語学の研究を進めている由本陽子さんに話を伺った。

●言語の規則性に魅せられて
英語学の道へ進もうと決め、神戸女学院大学の英文学科に入学した由本さん。「英語は好きでも得意でもありませんでしたが、高校時代は古文に非常に興味があり、品詞分解や係り結びが面白いと思っていました。今思えば、その頃から『言語』や『文法』に魅かれていたのかもしれないね。神戸女学院大学は1年生から専門的な内容を学べた

ので、すぐにこの世界にはまりました。
英語の文法は「S(主語)＋V(動詞)＋O(目的語)」と、目的語より先に動詞がくるが、日本語の場合は「S＋O＋V」と、目的語の後ろに動詞がくる。また、英語では名詞の前に現れる前置詞に対して日本語には後置詞(格助詞)があり、やはり並び順は逆だ。「動詞と目的語の語順、名詞と前置詞・後置詞の関係が、同じ一つの原理から導かれ、パラメータのスイッチによる操作で英

語と日本語の違いを作り出している。この理論を教わり、それまでパターンや構文で勉強していた語学は、もつと根本的な部分で規則性にコントロールされているんだということを知りました。なんて面白い世界なんだろうと興奮しましたね。
●様々な言語の共通点を探る
現在、由本さんは大阪大学の教授として理論言語学の研究に携わり、英語



由本さんの著書。(左から)『言語の意味と文法』(くろしお出版 由本陽子・岸本秀樹 編)／『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』(開拓社 由本陽子 著)／『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』(ひつじ書房 由本陽子 著)

■由本陽子(ゆもと・ようこ)
文学博士。1980年神戸女学院大学英文学科卒業。大阪大学大学院文学研究科英語学専攻博士課程修了後、1987年より大阪大学言語文化部、現・同大学院言語文化研究科教授。著書に『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』(開拓社)、『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』(ひつじ書房)〔新村賞受賞〕等がある。新村出記念財団評議員。日本英語学会、関西言語学会、日本言語学会、日本語文法学会等に所属。

すが、『野菜炒め』は野菜を炒めたものであり、『油炒め』は油を炒めたものではない。そのことを私達は瞬時に区別することが出来ます。新しい語が出来た時も、その言語を話す人であれば、初めて耳にしてもおおよその意味が解る。それはなぜか？新しい語はどのようなコンセプトで作られ、そのメカニズムにはどのような規則性があるのか？を、基になつて言語の意味と性質から解明していきます。また、英語は同じ動詞を複数の構文の文で用いることで多様な意味を表すことができる言語です。例えば日本語では『リングをトラックに積む』はOKでも『トラックをリングで積む』とは言えませんが、英語では『load apples onto a truck』『load the truck with apples』どちらも可能です。その違いが何に還元されるのか？複数の言語を比較対照することで人間の言語の本質に迫ることもできる、興味深い世界です。

●ワクワクする経験

●アジアへ目を向ける
これまで、理論言語学は欧米中心に研究が進められてきた。しかし、欧米語だけでは真理を探求できないという。「これからの言語理論には、アジアの言語が貢献しなくてはと思います。日本語の語彙は中国語からの影響も受けています。どこまでが中国語の影響で、何が日本独自のものなのかも見極める必要があります。英語と日本語だけでなく、中国語、韓国語等、様々な言語において、これまでに自分が考えてきた理論がどこまで適応可能なのかも試してみたいです。」

No Photo

● 2014年4月からの新プログラム ＜リベラルアーツ&サイエンスプログラム＞

主体的に学び、 共感性の高い人格を養う —複数の学問領域を柔軟に融合させる—

神戸女学院大学では、2014年度より新たに「リベラルアーツ&サイエンスプログラム」の運用を開始する。このプログラムは、現代の女性のライフステージの多様さを理解し、幅広い知識と教養と応用力を身につけた共感性の高い人格を養成するために、リベラルアーツ&サイエンス教育をこれまで以上に推進するもの。履修期間は2年生前期から4年生前期までの2年半で、希望する学生は所属学科の専門分野に加え、19分野の中から1分野を選択し、その分野の指定された科目群から20単位を修得する。専門分野以外にも、深い知識と技能を身に付けることが可能となる。運用開始にあたり、その背景や目的について、飯謙学長に話を伺った。



●神戸女学院大学 学長
飯 謙—— Il Ken

——新プログラム導入の目的をお聞かせ下さい。

神戸女学院大学は小規模大学ではありますが、人文系から社会系、自然科学系、芸術系まで、広範な領域の多彩な科目が揃っています。複数領域を学修する新プログラムは、これらの教育リソースを生かし、本学の目指す姿——豊かな人間性と国際感覚を育む、日本を代表するキリスト教主義リベラルアーツ女子大学——の具現化に向けたものです。既に共通科目の「探求コース」として他学科の専門科目を4単位履修する体制を取っていたことや、どの校舎へも5分以内で移動できるコンパクトな配置、教員の積極的な関与等も、今回の導入の助力となりました。

——専門分野以外を学修する意義は？

専門分野に加え、複数領域を学ぶことは全人的な人格形成に必要だというのがリベラルアーツ教育の考え方です。自分で学修への関心を広げ、それに従って学ぶ——つまり、セルフデザイン——する力が身に付きます。もともと本学では、1880年代末に院長エミリー・ブラウンが「師範学校」のような既定課程の受動的習得ではなく、自発的な学修によるリベラルアーツの性格を強調しており、創立以来、リベラルアーツ・カレッジのモデルとしての役割を果たしながら、常に学生に必要なものは何かを問い、提供してきました。近年、文部科学省の中央教育審議会でも主体的な学習が答申されました

が、これは本学が推進してきたリベラルアーツの精神に「時代が追いついてきた」と言えるのではないのでしょうか。また高度な科学技術と倫理学を同時に考える、時代の要請もあります。

——導入にあたり、求める学生像は？

新プログラムは共感性の高い学生を育てるプログラムのひとつです。「共感性」とは、自分があることだけに閉じ込めてしまわない、ということ。どのような立場に置かれても十分に能力を発揮し、状況に立ち向かうことができる学生。この考えは創立者イライザ・タルカットの生き様にルーツを求めることが出来ます。彼女は神戸女学院を創った後、岡山伝道の要請を受けて神戸を去り、その後も呼びかけに応答して、鳥取、広島、京都等で伝道者、教育者、看護師として働き、自らの活動を制限しませんでした。学生の皆さんにも様々な分野の思想や深みに恐れることなく翼を伸ばせる学修を志して欲しい。あらゆる話題にコミットできる精神を鍛錬して欲しいのです。複眼的な関心や思考を身につけた人。そういう人を世界は求めています。

——プラス20単位の修得は、かなりの負担になりそうですが。

それぐらい濃い中身でないといふ学びは得られません。しかし、このプログラムに従って特定分野から履修した20単位は、卒業単位の一部となります。複眼的な視点を持ち、何に対しても関心が広がるということとは就職活動にも有利です。

——学生を履修へ導くために、どのようなサポート体制をお考えですか？

副専攻を決定するのは入学後ですが、最初の関心を引き出せるよう共通科目に多くの入口を用意しています。各分野には1名ずつアカデミックアドバイザーがおり、履修指導はもちろん、個人指導も行い、学生がいつでも気軽に相談できる体制を敷きます。また、学術的な表層面だけでなく、教員との人格的な交わりも大切なリソース。本学は学科間の垣根が低く、多くの教員がチャペルアワーで話をするなど、学内で他学科のスタッフに触れる機会を多く設けています。そのため、どんな人があるのかを履修決定までに知ることが出来ます。

——運用にあたり、教員側に求めることは？

かつて本誌で対談した青山学院大学の生物学者 福岡伸一先生は、生物の本性は自身のDNAを残そうとすることと言っておられます。各教員も自分の専門分野の賛同者を増やしたいと願っています。学生に「自らの行動を制限せず、何でも受け入れる」という開放的な姿勢を求めると同様、教員も学科やゼミの学生に限定せず「全学生が自分の学生」と考え、皆さんの成長に関わる。そして互いに謙虚に成長する姿勢をと願っています。



学科内の柱となる
上記の19分野の中から
1分野を選択し、
その分野の指定された科目群から
20単位を修得します。

Column ロックフォード大学とジュリア・ダッドレー先生

ロックフォード大学は本学の創立者の一人、ジュリア・ダッドレー先生の出身校(当時はロックフォードセナリイ)です。ダッドレー先生はロックフォードを卒業後、数年の教職を経て、アメリカカンボードから宣教師の任命を受け、女性にキリスト教を伝えるために日本に派遣されました。そして、1873(明治6)年、神戸の雑居地で本学の前身となる私塾を始めました。



ジュリア・ダッドレー先生▶

No Photo

国際社会での活躍を目指して

●ロックフォード大学との交換留学制度

今年6月、神戸女学院大学は姉妹校であるアメリカ・ロックフォード大学からロバート・ヘッド学長と学生の計8名を迎え、キャンパスツアーや講義等、様々なプログラムを実施した。ロックフォード大学が本学を姉妹校に制定したのは1921年。以来、両校は学生交換プログラムを活発に行っている。今回の来訪を機に、本学はヘッド学長に名誉博士号を授与し、長年の友好関係に感謝するとともに今後の更なる発展を願った。両校の留学生の受け入れは、ミッションステートメントである“共感性の高い人格への成長”を目指し、“国際理解”や“リベラル・アーツ”の推進に寄与するとして互いに共感するもので、本学からはこれまでに50人を超える学生が留学している。今年5月にロックフォード大学への派遣留学を終えた田中さんと、4月から本学に留学中のIVYさんに話を聞いた。



No Photo

●文学部英文学科4年生
田中 さん

「留学のきっかけを教えてください。」
英語が好きで、高校の頃から大学に入ったから英語圏に留学しようと思っていました。ロックフォード大学を選んだのは、募集枠が1名だったから。ひとりでチャレンジしたかったんです。大都市シカゴにも近く、先生と学生の距離が近い小規模大学なのもいいなと思いました。

「留学先では移民学、文化人類学等、様々な授業を選択していますね。」
「移民学」は、T S U D A先生(英文学科)のゼミで移民学と女性学を学んでいたので選択しました。アメリカは移民大国なので、アジア系やヨーロッパ系に分けて幅広く勉強することができました。「文化人類学」は国際的な事を学びたかったので。軽い気持ちで取った「ミクロ経済学」は、経済の知識が全くなかったのに面白く、その流れで後期は「国際経済学」を取りました。あと、以前留学した先輩から「息抜き」の授業も取った方がいいよ」と聞いていたので、ギターレッスンやタップダンスも受講して楽しめました。

「留学により何か変化しましたか？」
「留学により何か変化しましたか？」

No Photo

●ロックフォード大学交換留学生
IVY さん

「IVYさんはロックフォード大学で田中さんと出会い、日本への留学を決めたんですね。神戸女学院の印象は？」
ロックフォード大学は其学なのでキャンパスの雰囲気は違いますが、自分が何を勉強したいのかははっきりしている点は日本もアメリカも一緒。そして、神戸女学院の学生はみんなオシャレです！

「なぜ日本に興味を持ったのですか？」
シカゴ美術館で開催されていた葛飾北斎展に行き、浮世絵に興味を持ちました。富嶽三十六景『神奈川沖波裏』を観た瞬間、ヨーロッパの伝統的なアートよりも強心を奪われたのです。日本の経済も面白く、そのふたつをもっと知するために日本語を学びたいと思いました。

「現在、神戸女学院でどのような勉強をしていますか？」
日本語のレベルがまだ低いので、チュートリアル形式で難波江先生(総合文化学科)の日本文化等を学ぶ授業を受けています。歴史を遡って日本文化を学び、そのなかにビジネスや経済学の話も盛り込まれています。それからF U K U S H I M A先生(英文学科)

「留学前は就職を考えていましたが、もっと勉強したくなり、大学院に進もうと思うようになりました。留学中に進路の内容までは決まらなかったのですが、帰国して2週間後にT S U D A先生が私を含め6人の学生をマレーシアで開催された『Global Summit of Women』に連れて行ってくれたり、そこで世界各国のトップクラスのビジネスウーマンを見ました。日本は男女のギャップが大きいと感じ、経済面はもちろん、女性学の観点からももっと知りたくなくて、女性学に進路を決めました。将来は、企業よりも国際機関で働きたいので、最低でも修士は取り

たい。卒業までに知識をつける本を読み、歴史も学び、出来る限りのことをやってみたいです。」
「ところで、田中さんとIVYさんは今日が初対面ではないのですか？」
はい。実はロックフォード大学での私の友人がIVYさんとルームメイトで、フットボールを観に行くときに知り会ったんです。「日本に興味がある」と言うので「神戸女学院は提携校だよ。おいでよ」と言ったら本当に来た(笑)。向こうではフェアウェルパーティでIVYさんの家に行き、日本では彼女のバースディパーティを開いたりもしました。



ロックフォード大学へ留学時のスナップ

「今後の抱負は？」
ひとつの国にフォーカスし、文化も含めたマクロ経済とミクロ経済の関係を勉強したいです。日本とアメリカの経済関係にも興味があるし、ホットな話題としてアフリカの国々の経済成長や、ブラジル、中国、南米の経済状況にも関心があります。留学後も、日本語のマスターを取りにまた戻ってこようと思います。スペイン語も勉強しているので、将来はそれと日本語と英語、3カ国語を使って国際的に働きたい。正確に決めているませんが、分析やフィールドワークをしながら研究者になる道も考えています。

(通訳：田中さん)

No Photo

No Photo

No Photo

Column ロックフォード大学より寄付された「ローズルーム」



1933年につくられた「ローズルーム」

1933年、本学の岡田山キャンパス移転に際し、ロックフォード大学の学生有志による寄付でつくられたのが「ロックフォードカレッジ・ルーム」。現在の文学館L-10教室です。娯楽室、社交室風に設えられたモダンな部屋で、学生用のホールとして使われました。カーテンが美しいバラ色であったことから「ローズルーム」という愛称がつけられました。L-10教室は普通の教室になっていますが、開設当時に使われていた椅子等は、今も図書館本館で使用されています。

アメリカン・ボード記念賞

本学創立85周年に際し、キリスト教宣教師団アメリカン・ボード(米国伝道会)より寄付された4000ドルを基金として創設。神戸女学院の建学の精神をよく学んだ全学部生を対象に募集する論文により選考。

●**文学部総合文化学科3年生 久保田 さん**
今回、受賞できたことを感謝いたします。講義やチャペルアワーなど、大学での日々の学びに助けられながら、学院標語である「愛神愛隣」を改めて考えてみました。今後は、考え抜けなかった彼方へ向けて、この素晴らしい学び舎で思考を重ねてゆくつもりです。

ラバーツ記念賞

14年間に渡り本学の英語教育に奉仕されたメイ・ラバーツ先生の夫君、故フロイド・ラバーツ牧師を記念し、マサチューセッツ州ピッツフィールド組合教会からの基金により創設。3、4年生のキリスト者および求道中の学生に与えられる。

●**音楽学部音楽学科4年生 楠原 さん**
栄誉ある賞をいただき、大変嬉しく思います。日々の礼拝や授業を通し、キリスト教徒である自覚が強められ、他者のために祈り、行動する人でありたいと願うようになりました。学生YMCAでの被災地ボランティアや学生寮有志とのチャリティーコンサートを実現することができ、支えてくださった方々に感謝の思いでいっぱいです。

ホルブルック記念賞

米国伝道会宣教師であり、アメリカの女性では初の医学博士号取得者であるメアリー・アンナ・ホルブルック先生。本学の自然科学教育の基礎を築いた先生を記念して創設。人間科学研究科修士課程2年生の学生に与えられる。

●**大学院人間科学研究科2年生 安齋 さん**
私は自身の研究を行うとともに、心理相談室でケースを担当しています。日々、クライアントと誠心誠意お会いしているつもりですが、まだまだ未熟者であり、自分の欠点はばかり探していたように思います。今回いただいた賞を自信と誇りにして、今後も、人としてもセラピストとしても成長していきたいと思います。

家庭会大学部会記念賞

本学創立50周年に際し、在学生の保護者を中心に組織された家庭会から寄せられた基金により創設。総合文化学科3年生の学生に与えられる。

●**文学部総合文化学科3年生 濱岡 さん**
この度の受賞を、とても光栄に思います。テストやレポートのために勉強するのではなく、知らないことを知りたい、より多角的な視点から知識と感性を関連付けられる力を培いたいという思いで学んできました。今も学び、思考することの楽しさを実感しています。

市川民慈子(女52)記念賞

本学卒業後、医学博士の学位を取得し、1949年より本学で生理学や体育講義等を担当された市川民慈子先生(1935年高等女学部卒)。1983年に家政学部児童学科教授を退任し、名誉教授となられた先生の遺贈により創設。環境・バイオサイエンス学科3年生の学生に与えられる。

●**人間科学部環境・バイオサイエンス学科3年生 沖野 さん**
受賞できたことに驚くとともに感謝しています。授業では、少人数制の丁寧な指導により、理解を深めて学ぶことができました。また、毎朝、図書館に行ってテキストを熟読し、集中して勉強に取り組みました。この賞を糧とし、自分を磨き、成長し続けられるように努めます。

記念賞を受賞して ●受賞者紹介

神戸女学院では、創立者や米国人宣教師、後援者、卒業生などを記念し、内外から寄せられる寄付金を基金として、様々な記念賞を設けている。対象は学業、人物ともに優れた学生で、推薦により各記念賞相当額が支給される。10月18日の授賞式を前に、各受賞者にコメントを貰った。



丹部トモ(C41)記念賞

本学大学部を卒業後、本学に着任し、1963年に第3代学長に就任、大学院設置に尽力された丹部トモ先生を記念して創設。文学研究科英文学専攻修士課程2年生の学生に与えられる。

●**大学院文学研究科2年生 中島 さん**
通訳・翻訳コースで翻訳家を目指して学んでいます。翻訳の理論や技術はもちろん、様々な分野の先生方から教えていただく機会があります。人生経験の分だけ勉強は楽しく、知れば知るほどもっと知りたくなる。そんな知的好奇心を満たしてくれる神戸女学院は知識の宝庫。素晴らしい環境を謳歌する毎日に感謝の気持ちでいっぱいです。

佐々城きく(女32C36)記念賞

大学部在学中に高等女学部(現在の中高部)の英習字を担当し、自治会文学部長として手腕を発揮された佐々城きく氏(1918年大学部卒)。結婚後は英語塾を開き、本学院の理事も務めた氏を記念して創設。英文学科3年生の学生に与えられる。

●**文学部英文学科3年生 津村 さん**
歴史ある賞をいただくことになり、大変嬉しく存じます。学ぶということが大好きな私にとって、調べたり、質問したり、意見を聞いたりという能動的な学びができる神戸女学院の環境が、自分の勉強に繋がっていると感じています。今後もこのキャンパスで勉学に励んでいきたいと思っています。

ブラウン記念賞

米国伝道会宣教師であるエミリー・マリア・ブラウン先生。1882年に来日し、第3代校長(1894年からは院長)として女子高等教育の礎を築かれた先生を記念して創設。総合文化学科3年生の学生に与えられる。

●**文学部総合文化学科3年生 石井田 さん**
受賞のお知らせをいただき、本当に驚きました。元来怠惰な性格ですが、信じて努力することの大切さを神戸女学院で学び、交換留学などの貴重な機会を与えていただきました。今後は賞に込められた建学の精神を受け継げるよう、努力を重ねていきたいと思っています。

ハンナ・ギューリック・スエヒロ記念賞(大学)

1890年代初頭、本学で音楽を教え、結婚後はハワイに住んで教育に尽力されたハンナ・ギューリック・スエヒロ先生と令嬢エミー・スエヒロ氏の遺言により創設。オーディションにより選考し、音楽を専攻する音楽学部4年生に与えられる。

●**音楽学部音楽学科4年生 廣瀬 さん**
先生方、支えて下さる周りの方々への感謝を忘れず、より一層真摯に音楽と向き合っていきたいと思っています。
●**音楽学部音楽学科4年生 松尾 さん**
作曲やピアノ、伴奏等、学びを導いて下さる先生方に感謝し、これから一層研鑽を積んでいきます。

タルカット記念賞

本学の創立者の一人であり初代校長のエライザ・タルカット先生を記念し、グレイス・F・リチャーズ夫人らアメリカ在住の諸姉からの寄付を基に創設。文学研究科比較文化学専攻修士課程2年生の学生に与えられる。

●**大学院文学研究科2年生 小峰 さん**
大変栄誉ある賞をいただき、感謝するとともに、ご指導いただいた先生方、ともに学んだ院生の方々、サポートしてくれた家族に深く感謝しています。大学院で過ごした時間は、私にとって最も充実した時間となりました。受賞を励みとし、今後の更なる成果を目指して精進していきたいと思います。

デフォレスト記念賞

1940年まで25年間に渡り院長として本学の歩みを支えたシャーロット・B・デフォレスト先生の功績を記念するために、国内外の有志から寄せられた寄付金を基金として創設。英文学科3年生の学生に与えられる。

●**文学部英文学科3年生 日下 さん**
1年生の時から毎日のように学内のEnglish Zoneを訪れ、英語でのコミュニケーションを練習できたことと、素晴らしい先生方や先輩に恵まれ、刺激を受けながら勉強できたことに感謝します。受賞は家族や友人の理解と支えがあったからこそであり、先生方のご指導のおかげです。感謝の思いを忘れず、これからも頑張っていきたいです。

草間世良(C30)記念賞

語学や音楽に堪能で、卒業後はアメリカの大学に学んだ草間世良氏(1913年専門部卒)。後に外交官夫人となり、自らもフランスの国際連盟委員会で活躍された氏を記念し、ピアニストである令嬢、安川加寿子氏からの寄付により創設。心理・行動科学学科3年生の学生に与えられる。

●**人間科学部心理・行動科学学科3年生 高尾 さん**
この度は栄誉ある賞をいただき、とても光栄です。アメリカで、KCC-JEEの元シカゴ支部長であり、草間様のご親戚である那須ご姉妹にお会いしました。この賞の意味を教えてください、偉大な先輩方のお姿に大きな感銘を受けました。たくさん学んで、草間様のように広い視野をもって世界に出ていける女性を目指します。

八代記念賞

1973年から1991年まで本学音楽学部教授として在職された八代みゆき先生からの寄贈により、舞踊専攻の充実のため創設。音楽学部舞踊専攻4年生の学生に与えられる。

●**音楽学部音楽学科4年生 井上 さん**
この度は名誉ある八代記念賞をいただき、大変光栄に思います。いつもどんな時でも熱くご指導くださった先生方をはじめ、共に刺激し合える大切な仲間、そして一番の支えである家族に心から感謝いたします。今後もより一層舞踊に励み、自分自身としっかりと向き合って精進して参ります。

Mary and Grace Stowe Memorial Dormitories

訓練の重要性を学ぶ

●メアリー・アンド・グレイス・ストウ学生寮 消防訓練 ～卒業生による講演会～



▲本学の卒業生であり、現在は神戸市消防局で活躍されている堀川佐和美さん(左)による講演会



消防訓練が行われた「メアリー・アンド・グレイス・ストウ学生寮」▶

6月5日、神戸女学院メアリー・アンド・グレイス・ストウ学生寮において、毎年恒例の消防訓練が行われた。訓練では、学生寮に隣接するボイラー室からの出火を想定。第一発見者となった寮長、副寮長が館内の非常ベルを鳴らして舎監へ連絡し、寮生は館内放送に従い、各自で確認していた避難経路を辿ってグラウンドへ移動した。毎晩23時の点呼の際、避難時の整列順を確認していた成果もあり、開始から119番通報、移動、点呼までの所要時間は約3分。留学生4名を含む全員が無事に避難することができた。

また、訓練終了後は卒業生であり、現在、神戸市消防局で活躍中の堀川佐和美さん(2011年3月文学部総合文化学科卒)による講演会が開催された。寮や学内で起こりうる火災の原因や身近で想定される災害、災害発生時の対応などについて説明があり、「非常時には、普段なら当たり前の行動ができなくなる。そうならないためには繰り返し訓練するしかありません」と、訓練の重要性が強調された。講演の最後は、寮の先輩という立場から「出会いや仲間を大切に、学生生活や寮生活を楽しんで過ごしてください」というメッセージで締めくくられた。

講演を聞いた寮生は、身近な先輩が社会に出て職務を全うしている姿に感動すると同時に、災害に対する意識をさらに高めたようだ。

Career Center



就活のノウハウを学び、企業を肌で感じる ●企業研究ワークショップ

9月9～13日の5日間、キャリアセンターでは3年生の希望者を対象とする企業研究ワークショップが行われた。今年が初めてとなるこの企画は、就職活動に向けた企業研究のきっかけ作りが目的。学生は学内講座で企業研究の方法やビジネスマナー、自己紹介の仕方、プレゼンの技法等を学び、フィールドワークで実際に企業訪問し、プレゼンテーションを行った。ワークショップに参加し、電機メーカーを訪問した細見さんに話を聞いた。

実は企業訪問先は、商品の製造・開発と営業をする会社だと思っていたので、興味がなかったんです。訪問したことで、人事やインターンシップの企画、広報活動等、様々な仕事があることを知り、まずは視野を広げる必要があると感じました。これをきっかけに、たくさんの方の企業に目を向けて、インターンシップに参加する、新聞を読む、プレゼン力を高める等、次に繋げていきたいです。

学内講座の質疑応答練習で、自分の考えを伝えることの難しさを痛感。例えば「待遇について教えてくださーい」といきなり聞くのではなく、「出産後も働きたいと考えているのですが、産休・育休は取得しやすいですか？」と、理由を述べてから質問することを学びました。

今までは、企業に対してクールで固いイメージを持っていたのですが、実際に働く人達と話してみると、親しみもあり、私達の質問に熱心に耳を傾け、「学生の間にやっておいた方がよいこと」等のアドバイスも下さって嬉しかったです。



●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科3年生 細見 さん

講演会・公開講座・コンサートなど

- 神戸女学院大学英語英文学会(KCSES)
日 時：11月29日(金)14:00～16:15
特別講演 15:15～
「日本外交の決定力—1997年夏 カンボディア内紛の後始末—」
講 師：内藤 昌平氏(元駐ベルギー大使)
場 所：神戸女学院大学文学館L-28教室
参加費：500円(現教職員・学生以外は参加費必要(退職者含む))
問い合わせ：文学部事務室英文学科 TEL0798-51-8548
- 秋季公開講座2013
生命をみつめなおす
第1回「生老病死」—細胞生物学から見ると—
日 時：11月16日(土)10:00～11:30
講 師：西田 昌司(神戸女学院大学人間科学部環境・バイオサイエンス学科 教授)
第2回「死を考える」—豊かな死生観を求めて—
日 時：11月23日(土)10:00～11:30
講 師：中野 敬一(神戸女学院大学文学部総合文化学科 准教授)
第3回「あなたと私を大切に思い生きること」—HIVカウンセリングの現場から—
日 時：12月7日(土)10:00～11:30
講 師：榎本 てる子氏(関西学院大学神学部 准教授)
場 所：神戸女学院大学メアリー・アンナ・ホルブルック記念館 301号教室
問い合わせ：広報室 TEL0798-51-8585

音楽学部演奏会・公演

- 定期演奏会
日 時：12月3日(火)18:30開演
場 所：兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホール
入場料：1,000円(全席指定)
- 第5回舞踊専攻卒業公演
日 時：12月5日(木)～7日(土)
12月5日(木)、6日(金)……18:30開演予定
12月7日(土)……13:00、18:00開演予定
場 所：神戸女学院大学エミリー・ブラウン記念館スタジオA
入場料：1,000円
- オペラ実習発表会
日 時：2014年2月13日(木)時間未定
場 所：神戸女学院講堂
- 卒業演奏会
日 時：2014年2月24日(月)～26日(水)18:00開演
場 所：神戸女学院講堂
- 舞踊専攻第8回公演
日 時：2014年3月6日(木)、7日(金)
場 所：兵庫県立芸術文化センター阪急中ホール
入場料：未定
- 新人演奏会
日 時：2014年4月17日(木)
会 場：いずみホール
入場料：1,000円
- 修了披露演奏会
日 時：2014年4月24日(木)
会 場：宝塚ベガホール
入場料：1,000円
問い合わせ：音楽学部事務室 TEL0798-51-8550 FAX0798-51-8551
E-mail:music@mail.kobe-c.ac.jp

アウトリーチ・センターイベント

- 子どものためのオルガン・コンサート～おはなしオルガン「ロバの王子」～
日 時：11月23日(土・祝)11:00開演(10:30開場)
場 所：神戸女学院講堂
出 演：松居直美(オルガニスト、本学音楽学部非常勤講師)
助演)片桐聖子(神戸女学院オルガニスト)
助演)西山聡子(神戸女学院オルガニスト)
参加費用：大人1,000円、子ども(3歳～19歳)500円 申し込み要
※3歳未満のお子様のご入場はご遠慮ください。
- 子どものためのクリスマス・コンサート～聴いて歌って動いて感じよう～
日 時：12月14日(土)
第1部：11:00～12:00(10:30開場)年齢制限なし
第2部：15:30～16:30(15:00開場)小学生以上対象
出 演：アンサンブルたまた箱(「音楽によるアウトリーチ」既修生)
橋本美奈子、大澤侑子(ピアノ)、藤田理世(声楽)、
井上佳那子(ヴァイオリン・賛助出演)
場 所：神戸女学院講堂
参加費用：大人500円、子ども(19歳以下)300円 申し込み要
問い合わせ：音楽学部アウトリーチ・センター(平日10:00～15:00)
TEL0798-51-8584 FAX0798-51-8551
E-mail:concertfch@mail.kobe-c.ac.jp

金曜日公開プログラム

- クリスマスオルガンコンサート
日 時：12月6日(金)10:35～11:25
場 所：神戸女学院講堂
出 演：学院オルガニスト 西山 聡子、オルガニスト 追中 宏美
- キャロルを歌おう♪
日 時：12月13日(金)10:35～11:25
場 所：神戸女学院講堂
指 導：音楽学部教授 齊藤 言子
- 新年礼拝
日 時：2014年1月10日(金)10:35～11:25
場 所：神戸女学院ソールチャペル
説 教：大学チャプレン 松田 央
- 卒業生による演奏会
日 時：2014年1月17日(金)10:35～11:25
場 所：神戸女学院講堂
出 演：未定
問い合わせ：チャプレン室 TEL0798-51-8502

高校生等参加イベント

- オープンキャンパス
日 時：11月23日(土・祝)10:30～15:00
12月13日(金)17:00～19:00
2014年3月21日(金・祝)10:30～15:00
内 容：一般入試過去問対策講座(11月のみ)、模擬講義(11月・3月のみ)、
各種相談コーナー、キャンパスツアー他
問い合わせ：入学センター TEL0798-51-8543
- 理学館体験
日 時：11月23(土・祝)14:30～15:30
2014年3月21日(金・祝)時間未定
場 所：神戸女学院大学 理学館S-24教室
問い合わせ：人間科学部事務室
TEL0798-51-8553 E-mail:taiken@mail.kobe-c.ac.jp

めぐみ会主催行事

めぐみ会公開講座

- 2013アートセミナー
「死と祈りの美術」(全3回)
日 時：第1回 11月22日(金)11:00～12:30
グリュネヴァルト《イーゼンハイムの祭壇画》：
凄惨なイメージに託された救済の祈り
第2回 11月29日(金)11:00～12:30
優美にして謎めいた死せるキリスト：
フィレンツェの画家ボントルマの《十字架降下》
第3回 12月13日(金)11:00～12:30
カリダー施療院聖堂(セビーリャ)：
スペイン・バロックの死と救済のドラマ
講 師：大阪大学文学研究科准教授・神戸女学院大学非常勤講師 岡田 裕成 氏
会 場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：各回1,000円(学生は無料) ※要予約(HP可)
- 2013キリスト教セミナー
聖書の信仰の祖型—羊飼いのエートス
日 時：第1回 2014年2月4日(火)10:30～12:00
「羊飼いの神観—共にいる神」
第2回 2014年2月18日(火)10:30～12:00
「権力への感情—反王制思想」
第3回 2014年3月11日(火)10:30～12:00
「精神の継承—さまざまな法」
講 師：神戸女学院チャプレン・大学学長 飯 謙 氏
会 場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：各回1,000円(学生は無料) ※要予約(HP可)
- 2013外国語教室
「神戸女学院めぐみ教育基金」招聘教員による外国語教室特別講演会
日 時：2014年1月24日(金)11:30～13:30
講 師：音楽学部(舞踊専攻)客員准教授 Joannes Hubertus NUYTS 氏
会 場：神戸女学院大学エミリー・ブラウン記念館
受講料：無料 ※要予約(HP可)
申し込み・問い合わせ：公益社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会
TEL 0798-51-3545 URL: http://www.megumikai.or.jp/

—※行事について特に記述のないものは、基本的に申し込み不要・無料です。—